

『走れメロス』とディオニュシオス伝説

五 之 治 昌 比 呂

I 序

太宰治が1940年に発表した短編『走れメロス』は、日本人なら知らぬ者がいないほど有名な作品であるが、二十年先立つ1910年に鈴木三重吉が『赤い鳥』に寄せた童話『デイモンとピシアス』は、それほど知られているとは言えない。後者はシチリア島の僭主ディオニュシオスにまつわる逸話を複数集めたものであり、表題にもなっているデイモンとピシアスの物語は特に念入りに語られていて、作品の半分を占めている。一読すれば分かるとおり、このデイモンとピシアスの物語は『走れメロス』とほとんど同じ筋である。しかし、誰もが素朴な疑問を抱くであろう。鈴木三重吉ではデイモンとピシアスとなっている主人公の名が、なぜ太宰ではメロスとセリヌンティウスになっているのか。

太宰の作品があまりに名高いため日本人は「メロス」の名前しか知らないが、西欧では事情が全く異なる。少し大きな語学辞書や百科事典などを引いてみれば、'Damon and Pythias'という項目を見つけることができ、これが古代ギリシア・ローマの伝承に由来するものであり、固い友情で結ばれた親友を意味する慣用句として使われていることが分かる。逆に、辞典の中にメロスの名を見いだすことはできない。つまり、西欧においては三重吉の主人公の名前の方が正統なのであって、太宰の方はほとんど知られていない名前らしいのである。

したがって今度は、なぜ太宰はメロスとセリヌンティウスなどという名前を採用したのか、と問い直さねばならなくなる。実は、その直接的な原因は太宰の研究者によってすでに明らかにされているのだが、このあたりの説明は後回しにしたい。先に古代におけるこの伝承の背景について簡単にまとめておく必要がある。名前が二通りになった原因の一部は、古代伝承における少々複雑な事情にあるからだ。また、鈴木三重吉の童話にはディオニュシオスにまつわる複数の逸話が収められているが、これらの典拠と物語の異同を最初にまとめておきたい。『走れメロス』の典拠に関してはすでにいくつかの研究があるが、三重吉の方はほとんど取り上げられることがないようであるし、この童話にはディオニュシオス伝説のうち比較的よく知られたものが収録されているので、

メロス伝説とあわせてこれらも紹介しておく価値があると考えからである。論の後半はメロス伝説を古代から太宰まで跡づける。そして、主人公の名前の問題のみならず、伝承全体を視野に置くことによって見えてくる、『走れメロス』という作品の独自性について私の所見を述べてみたい。

II 鈴木三重吉のディオニュシオス伝説

鈴木三重吉の童話『デイモンとピシ阿斯』は、シチリア島の僭主ディオニュシオス一世にまつわる逸話を集めたものである。ディオニュシオス一世は前5世紀末にシラクサイ市の有力な将軍となり、ついには独裁者となった人物である。彼は、軍事力を強化してカルタゴ人と度々戦争を行ったり、南イタリアに勢力を伸張したりと、野心的な僭主であった。彼の死後、息子のディオニュシオス二世が父の座を継いでやはり僭主として権力を振るう。しかし、最後には追放されてコリントスで余生を送ることとなった。この両ディオニュシオスにまつわる逸話はかなりの数にのぼるが、どちらのディオニュシオスに属するものか判然としないものも多い。

『デイモンとピシ阿斯』の冒頭にはディオニュシオス一世に関する歴史的背景が説明されている。そして、この独裁者が残忍な性格の持ち主であり、市民たちは憎みつつも彼に恐れをなしていたこと、ディオニュシオスの方も市民たちの心の内を察知しており、暗殺を恐れてあらゆる人間を疑わないではおれなかったことが語られる。このあと数々の逸話が列挙される形になっている。ここでは便宜上全体を七つの逸話として分割し、以下にそれぞれの典拠と異同を示すことにする。なお、三重吉は固有名詞を英語の発音で表記しているが、混乱を避けるために古典語の読みに統一する。

〔1〕牢屋の後ろの岩を下から掘り開けて部屋を作る。囚人たちの声が聞こえる仕掛けを作って、囚人の話を盗み聞きする。

この岩の牢獄は、「ディオニュシオスの耳」と呼ばれる、切り立った岩山にぽっかりと空いた洞窟のことである。この洞窟の正面の開口は、天井に向かうほど狭くなる細長い三角形のような形になっていて、この三角形がS字のカーブを描きながら入口から奥に至る。最奥の壁のてっぺんには小さな穴が開いており、穴の向こう側は細い通路になっていて、階段を経て崖の上に出られる構

造になっている。この穴の向こう側の通路にいますと、洞窟内のどこで発せられた音であろうと聞き取ることができるという。このきわめて特異な反響構造が「耳」と呼ばれる所以である⁽¹⁾。

現在では観光名所にもなっているほど有名な「ディオニュシオスの耳」であるが、ディオニュシオスがこれを囚人の会話を盗聴するために作ったなどという伝承は、実は古代には存在しない。Sabine によれば、「耳」という呼び名と、ディオニュシオスが盗聴のために作ったという伝承は 16 世紀以来のものであるという。さらに彼は、洞窟とディオニュシオスを結びつける直接的な証拠は古代にはないと述べている⁽²⁾。

しかし、ディオニュシオスが石切場の洞窟を牢獄として用いていたという証言は古代にも存在する。キケロ（『ウェッレス弾劾』5,27,68）は、岩の牢獄を作ったのはディオニュシオスであり、歴代の王や僭主がこれを利用してきたと述べているし、アイリアノス（『ギリシア奇談集』12,44）も、ディオニュシオスが牢獄として用いたこと、現在では住居として利用している人々がいることを伝えている。ただし、反響構造を利用した盗聴の話や、「耳」という呼び名はどこにも見あたらない。洞窟内の音を聞くことのできる穴や通路が古代にすでに存在したのかどうかも分からないが、盗聴の逸話は Sabine の言うようにおそらく後代の人々が付け加えたものであり、三重吉の粉本もこの話を古代の出典から直接取材したのではないと思われる。

〔2〕 寝室の周りに堀をめぐらし、取り外しのできる橋で部屋に出入りした。

これはキケロの『トゥスクルム荘対談集』5,59 が典拠である。ワレリウス・マクシムス（『著名言行録』9,13(ext),4）とアンミアヌス・マルケッリヌス（『歴史』16,8,10）もキケロに依拠してこの話を伝えている。

〔3〕 おかかえの理髪人が「俺は暴君の喉へ毎朝剃刀をあてているのだ」と自慢していたことを耳にし、理髪人を処刑する。それからは自分の娘たちに髭を剃らせていた。のちには娘たちも信用できず、焼いた栗の殻で髭を焼かせた。

これは比較的有名な話であつたらしく、何人かの作家が言及している⁽³⁾。ただし、古代には理髪人を処刑したという話はない。また、娘を理髪人の代わりにしたこと、木の実（栗とは特定していない）の殻で髭を焼かせたことを伝

えるのはキケロのみであり、プルタルコスは「炭火で」、ディオドロスは単に「焼き焦がした」と記している。

〔4〕アンティボンという男に、真鍮はどこから採れるものが一番いいかと尋ねる。彼が、暴君ペイシストラトスを暗殺したハルモディオスとアリストゲイトンの銅像のが一番上等だと答えたので、この男を処刑してしまう。

この話はよく知られたものではないし、そもそもディオニュシオス伝説に属するものでもない。出典はディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』6,2,50であるが、これは犬儒派の哲学者ディオゲネスの逸話である。彼は「ある独裁者」から尋ねられてこう答えたと言われている。どうやら三重吉のアンティボンというのは架空の人物らしい。また、当然ながらディオゲネスが処刑されたなどという話もない。ハルモディオスとアリストゲイトンの二人は、僭主ヒッピ阿斯（ペイシストラトスではない）の暗殺を企てたが捕まって処刑された人物である。二人は僭主政解体後に「解放者」として称えられ、広場に像が立てられた。つまりディオゲネスがその「独裁者」に嫌みを言ったというだけの話であり、真偽はともかくいかにもこの哲学者にふさわしい逸話である。

この逸話が三重吉の童話（あるいはその粉本）に紛れ込んだのは、そのあとに次のような話が続いているからである。すなわち、「ディオニュシオスは友人をどのように扱っているのか」と尋ねられたディオゲネスは、「財布のようにだ、中身の詰まったのはつり下げているが、空っぽなのは放り出している」と答えたという。こうした逸話の順序のために、直前の「ある独裁者」もディオニュシオスと見なされてしまったのであろう。

〔5〕友人のダモクレス（童話ではドモクレス）が一日でいいからディオニュシオスのような身分になってみたいと言っていたことを耳にする。そこでダモクレスを招いて贅沢なもてなしをする。ダモクレスは喜んだが、自分の頭上に鋭い大きな剣が一本の馬の尾の毛でつり下げられているのに気づいて青くなる。ディオニュシオスは、自分の境遇はこの通りだということを示すためにこれを仕組んだのだった。

これは非常に有名な逸話であり、複数の古代作家が言及している。最も記述

が詳しく、後の伝承の源ともなったのはキケロ『トゥスкулム』5,61である。ここでは、ダモクレスはディオニュシオスの追従者であり、彼の面前で王の生活を羨む発言をしたことになっている。また剣は、贅を尽くした饗応の最中に王自らがつるすように命じたと語られている。この「ダモクレスの剣」は古代より現代に至るまで諺として好んで用いられてきた。1961年にケネディ大統領が国連総会で演説を行った際、偶発核戦争の危機を「ダモクレスの剣」になぞらえたのはそのよい例である⁽⁴⁾。

〔6〕ピロクセノス（童話ではフィロセヌス）という学者がディオニュシオスの作った詩をけなしたのに腹を立て、彼を牢屋に入れる。新しい自信作ができたので、王はピロクセノスを牢屋から出してその詩を見せる。今度はピロクセノスは何も言わず、自分から牢に入った。王は笑って彼を解放した。

このエピソードはディオドロス『世界史』15,6,1-5が詳しく伝えているものである。そこでは、ピロクセノスが王の新しい自信作の感想を求められたのは、友人の取りなしで釈放されてしばらくの後ということになっている。またディオドロスはさらにエピソードを続けている。大目に見たとはいえ、ディオニュシオスは不適切なときに率直な態度をとることを控えるようピロクセノスに求めた。彼は真実も尊重するし、王の好意も保持するつもりだと言う。あるとき痛ましい内容の詩を作った王は彼に感想を訊ねた。彼は「哀れだ」とだけ答える。王は自分の詩が哀れを誘うという褒め言葉ととったが、ほかの人々はピロクセノスの真意を見抜いて、詩の出来が哀れだという意味に解釈したという。

私が調べた限りこの話はディオドロスにしか見られない。ただし、詩人ピロクセノスが〔1〕の逸話で述べた岩の牢獄に閉じこめられていたことを、アイリアノスが伝えている（『ギリシア奇談集』12,44）。彼は牢中で詩作を続けたが、後世それにちなんで最も美しい洞窟には彼の名が付けられたという。なお、この逸話が示すとおりディオニュシオスは文化的な一面も持っていて、『ヘクトルの身代金』という自作の悲劇がアテナイで一等賞を得たこともある（ただし政治的な配慮によるらしい）。

鈴木三重吉の作品は童話としてはかなりユニークなものである。まず、ただ逸話だけを語るのではなく、ディオニュシオスという歴史上の人物に関するかなり詳しい伝記的説明までも付け加えている。また、作品には髭を焼く話や「ダ

モクレスの剣」といったよく知られた話だけでなく、それほど有名でない逸話や、銅像の話のように誤ってディオニュシオス伝説に紛れ込んだものまで含まれている。これほど多彩な逸話を集めているのは珍しい例であろう。

もちろんユニークなのは三重吉の用いた種本の方なのかもしれない。三重吉は自分の童話の出典を示すこともあるが、『デイモンとピンティアス』に関しては全く記述がなく、残念ながら何を種本に使ったのかは知ることができない。あるとしての話だが、当然この種本の種本をたどることも不可能である。ただひとつ言えることは、大元のソースを書いた者は一般常識以上の古典の知識を持っていた人物であるということだ。これだけの材料を集めるためには、少なくともキケロ、ディオドロス、ディオゲネス・ラエルティオスを読んでいなければならない。おそらくそのソースは童話ではなく、ディオニュシオスの伝記や彼にまつわる逸話をかなり包括的にまとめた歴史書の類ではないだろうか。

III ダモンとピンティアス

三重吉が童話全体の半分をさいている「デイモンとピンティアス」の物語は、数あるディオニュシオス伝説の中でも最も有名なものである。この章では古代におけるこの物語の出典と異同を簡単にまとめ、後代の文学作品化、また同じモチーフを含む民話などについても述べることにする。なお、主人公の名は Damon と Phinthias が正しく、Pythias は後代に誤り伝わった名前である。以下は特に理由のない限り古典語の「ダモンとピンティアス」の読みを用いる。

〔1〕古代における伝承

この物語の最も古い形を伝えるのは、イアンブリコス（後 250～325 年頃）が自著『ピュタゴラス伝』233-237 の中で引いているアリストクセノス（前 4 世紀）作『ピュタゴラス伝』の一節である。アリストクセノスはこの話を、零落してコリントスで文字を教えていたディオニュシオス二世自身から聞いたと書いている。つまり実話ということだ。そのあらましは次のとおりである。

ディオニュシオスの取り巻きの中にピュタゴラス学派の人々を中傷する者たちがいた。連中の見せかけの立派さなど、恐ろしい目に遭わせてやれば消し飛んでしまうだろうというのだ。しかしこれに反論する者もいて、お互いに論争を始めた。そこで王は冷酷な実験を思いつく。ピュタゴラス派の学徒ピンティアスに陰謀の共犯の濡れ衣を着せ、彼に死刑を宣告したのである。ピンティア

スはこの決定を受け入れるが、身辺のことや友人ダモンのことを片づけるためにその日の残りの時間を与えてくれるよう嘆願する。また、一時釈放の保証として友人のダモンを人質に立てるという。

ディオニュシオスが驚いて、死の担保になるような人間がいるのかと訊ねると、ピンティアスはダモンを呼び出す。事情を聞いたダモンは人質となってピンティアスの帰りを待つことを引き受ける。学派を中傷していた人々は、見捨てられるに決まっていると言ってダモンを嘲った。しかし日が沈むころピンティアスが戻ってきたために、皆は驚愕することとなった。ディオニュシオスは二人を抱いて接吻し、自分を三人目の友に加えてくれるよう懇願したが、二人はそれを固辞した。

ダモン・ピンティアス伝説について言及している古典作家は、ディオドロス、キケロ、ワレリウス・マクシムス、ヒュギヌス、プルタルコス、ポリュアイノス、ボルピュリオス、コンスタンティノス七世らであるが⁽⁵⁾、ヒュギヌスとポリュアイノス以外は、どの作家も基本的にこのアリストクセノスのバージョンと大きく異なることはない。ただしこの逸話をディオニュシオス二世のものとする作家はなく、キケロは一世のものであると明言している。以下に、ヒュギヌスとポリュアイノス以外の作家間の異同を五点にしぼってまとめておく。

(1) どちらが人質になったか

キケロとそれを参照したワレリウスでは、どちらが死刑を宣告され、どちらが人質になったかが記されていない。

(2) ピンティアスが死刑を宣告された理由

ディオドロスとコンスタンティノス七世は、ピンティアスが実際にディオニュシオスに陰謀を企てたとしている。キケロとワレリウスは原因を述べてない

(3) 一時釈放を求める理由

ディオドロス、ワレリウス、コンスタンティノス七世では身辺の整理のため、キケロ『義務について』では家族を人に委ねるため、となっている。

(4) 帰還までの期日

ディオドロス、ワレリウス、コンスタンティノス七世には記述がない。キケロ『義務について』では、二人のうち的一方が「数日間」の釈放を求めたと書かれている。

(5) どの作家も、ディオニュシオスが二人に自分を三人目の友に加えてくれる

よう懇願したと書いているが、断られたとは書いていない。

『走れメロス』の章でも述べるが、帰還の期限については特に注目する必要がある。アリストクセノスでは、ピンティアスはその日のうちに戻ることになっている。恐らく彼の住まいはシラクサイ市の中にあつたのであり、往復にそれほど時間を要しなかったのであろう。本当に戻ってくるかどうかだけが問題だったのだ。そのような条件ならば、この話が実話であつたとしてもあながち不思議ではないように思われる。

〔2〕鈴木三重吉のバージョン

鈴木三重吉（あるいはその粉本）ではこの逸話はどのように扱われているか。まず目に付くのは、話の冒頭でダモンとピンティアスの二人がピタゴラス学派の学徒であることが述べられ、自制の重視、輪廻の思想といったこの学派の特徴について若干の説明をしていることである。古代の作家たちも二人がピタゴラス学派に属していたことは述べているが、学派そのものに関する説明はことさら付け加えていない。この点からも粉本の作者がある程度の古典の知識を有していたことが推察される。

さて、先ほどの五点について見ていけば次のようになる。

- (1)ピンティアスの方が死刑を宣告され、ダモンが人質となる。
- (2)ピンティアスは「いつもディオニュシオスに反抗しているように睨まれ」たために逮捕された。
- (3)ギリシアに土地を持っており、身内の者もいる。一度帰ってすべてのことを片づけたい、という理由。
- (4)はっきりと数字は挙げていないが、当日中でないことは確か。
- (5)ディオニュシオスは二人の友人として迎えてもらえるよう懇願するが、断られたという記述はない。

これらの点から考えると、三重吉のバージョンはディオドロスに基づいているようだ。ただし、ピンティアスがギリシア本土に帰るという要素は新しいものである。

さて、三重吉の『デイモンとピシアス』に語られている数々の逸話は、総じてディオニュシオスの人間不信と残虐性に関する物語であると言えるだろう。

そして、最後のデイモンとピシアスの物語に至り、二人の信頼関係に感動した王が、あたかもそれまでの所行を反省して、改心することを予想させるように童話全体が組み立てられているのである。

〔3〕ヒュギヌスとポリュアイノス

全く同じ筋でありながら、これまで見てきたバージョンと大きく異なるのがヒュギヌスとポリュアイノスである。このうちポリュアイノスの方はほとんど知られていないが、ヒュギヌスの方はシラーのバラードの素材となったことによって比較的有名である。

ヒュギヌス『神話伝説集』の 257 番のセクションは「友情によって結ばれた者たち」と題されており、最初に神話・歴史上親友として高名なペアの名前が列挙され、それに続いてモエルスとセリヌンティウスの物語、ハルモディオスとアリストゲイトンの物語の二つが長く詳しく語られるという形式になっている。このヒュギヌスのバージョンはこれまで日本で紹介されることがほとんどなかったようであるから、問題の箇所だけここに訳出することにする。

シチリアの僭主ディオニュシオスは極めて残忍であり、市民を拷問にかけて殺していたので、モエルスは王を殺そうと思った。彼は武器を持っているところを衛兵に捕まり、王のところへ引き出された。彼は尋問されて、王を殺そうと思ったのだと答えた。王は彼に磔の刑を命じた。モエルスは自分の妹を嫁がせるために三日間の猶予を与えてくれるよう王に頼んだ。三日目に戻ってくる保証として、同輩の友人セリヌンティウスを王に差し出した。王は彼に妹を嫁がせるための猶予を与え、セリヌンティウスに、もし期日までにモエルスが戻ってこなかったら、お前が同じ罰を受けモエルスは釈放すると言った。

モエルスが妹を嫁がせ戻ろうとしたとき、突然嵐と大雨が起こり、川が増水して、船で渡ることも泳いで渡ることもできなくなった。モエルスは川岸に座り込み、友が自分の身代わりに死んでしまうと泣き出した。一方、もう三日目の第六時になったというのに彼がやって来ないので、バラリス⁽⁶⁾がセリヌンティウスを十字架にかけよう命じると、セリヌンティウスは王に日はまだ過ぎていないと主張した。第九時になったとき、王はセリヌンティウスを十字架に連れていくよう命じた。彼が引かれていくあいだに、モエルスはやっとのことで川を渡り、死刑執行人に追いつこうとし、遠くから「待

て、執行人、張本人の私はここにいるぞ」と叫んだ。事態が王に報じられた。王は二人を自分のところに連れてくるよう命じ、モエルの命を助け、自分も友情に加えてくれるよう二人に懇願した。

先ほどと同じ五つの観点を列挙してみると次のようになる。

- (1)一時釈放されるのがモエルス、人質になるのがセリヌンティウスという名前になっている。二人がピュタゴラス学派であるという記述はない。
- (2)モエルスはディオニュシオスの残虐性に怒り、実際に殺そうとして逮捕される。
- (3)釈放を求める理由は、「妹を嫁がせるため」である。
- (4)猶予期間が「三日間」とはっきり示されている。
- (5)王が二人の友情に自分も加えてくれるよう懇願する。断られたという記述はない。

主人公の名前も(3)(4)も他には見られぬ要素であるが、何より注目すべきは、モエルの帰還の際に増水した川が障害となって立ちだかるという道具立てが付加されていることである。上に挙げた古典作品の多くは、ピンティアスが期限ぎりぎりになって帰ってきたと記している。ヒュギヌスにおいてもそれは同じであるが、増水した川という要素が加わることで物語にさらになる緊迫感が加わっている。

さらにひとつ奇妙なことがある。実は、ヒュギヌスは別の箇所ではダモンとピンティアス（原文ではピンティア）について言及しているのである。それは第254番の「親孝行な者たち」と題されたセクションで、「シチリアのアエトナ山が初めて噴火したとき、ダモンは母を火から助け出し、同様にピンティアは父を助け出した」と述べられている。二人の名がペアになっているのに話は全く別のものである。なお、モエルス、ピンティアスという人物は古典文学の中でヒュギヌス以外には言及がないということを付け加えておく。

ポリュアイノス『戦術書』に語られている物語も基本的には他の伝承と同じであるが、いくつかの点では大きく異なっている。まず、これまでと同じ五つの点についてまとめてみる。

(1)死刑を宣告されるのがエウエペノス、人質になるのがエウクリトスという名前になっている。この名前も他には登場しない名前である。

(2)ディオニュシオスはイタリアの諸都市と友好条約の交渉を行おうとしていたが、エウエペノスが各都市のピュタゴラス派の人々に僭主の話を信じないよう忠告した。これに腹を立てた王はエウエペノスを捕らえて告訴する。明言されてはいないが、エウエペノスもピュタゴラス派の人物であることは確実である。

(3)釈放を願い出る理由は、バリオンに住んでいる妹を嫁がせるためである。

(4)釈放の期限は半年となっている。ただし、この期限は人質になるエウクリトスが申し出るものであり、ディオニュシオスが決めるのではない。また、期限内に戻らなければ人質を処刑するなどということはことさら書いてない。

(5)他の伝承と同じく、感心した王が三番目の友人にしてくれるよう懇願する。加えて、王は二人にシチリアに留まってくれるよう頼むが、二人はこれを断る。ディオニュシオスは二人の希望を聞き入れ、以後人々から信頼されるようになったという。

また、このバージョンに特徴的なのは地名が具体的であることだ。ディオニュシオスがエウエペノスを捕らえるのは、後者が南イタリアの「メタポンティオンからレギオン」に向かう途上であるし、嫁がせるべき妹は「バリオン」に住んでいる。バリオンは小アジアの町であり、シチリアから往復することを考えると「半年」という保釈期間は妥当なものかもしれない。しかしこの半年という長い期間のために物語は緊迫感の欠けたものとなっており、この点はヒュギヌスと対照的である。

ダモン・ピンティアス伝説になぜいくつものバージョンが存在するのか、その謎を解くための手がかりは、残念ながら全く残されていない。伝説に異同は付き物とはいえ、主人公の名前だけで三種類もあるというのはひじょうに奇妙である。また、ヒュギヌスとポリュアイノスのバージョンは「妹を嫁がせる」というモチーフが共通であり、両者になんらかの共通のソースが存在することが推測されるが、その他の点ではまるで異なっているから、それ以上推理を進めることもできない。

〔4〕後代の文学作品化

古典期以降、ダモンとピンティアスの伝説が文学作品の中で取り上げられるのは、14 世紀になってからである。ロンバルディアの修道士、ヤコブス・デ・ケッソリス (Jacobus de Cessolis) は、チェスの駒の特性や競技のルールになぞらえて、現実社会における道徳を説く説教を行った。その説教には古典や聖書からの様々なエピソードが盛り込まれたが、ダモンとピンティアスの物語もそのひとつだったのである。この説教は韻文にも改編され、14 世紀初頭にそのラテン語による全文が公けにされた。この書物はかなりの人気を博したらしく、14 世紀半ばにフランス語に翻訳され、イギリスでは 15 世紀後半にカクストンの英語バージョン ("The Game of Chess") が出版された。さらにドイツではコンラート・フォン・アメンハウゼンらがこれを模倣し、多くの「チェスの本」が書かれることとなった。このうち、マイスター・シュテファンの「チェスの本」ではピンティアスの名が Physius になっているとのことである⁽⁷⁾。

イギリスではカクストンによる「チェスの本」の翻訳ののち、トマス・エリオットが『為政者論』(1531 年) 2,11 にダモンの話を引いている。さらに、リチャード・エドワーズが『デイモンとピシアス』("Damon and Pithias") という劇を発表する(1571 年と 1582 年に出版)。ここではダモンがスパイとして逮捕され、ピンティアスが人質になることを申し出る。ダモンは身辺整理のために一時の釈放を乞い、二ヶ月の猶予が許される。この劇はシェイクスピアの『ヴェローナの二紳士』の素材ともなった。

これより時代が下ると、シラー以外にはめぼしい文学作品化は見あたらなくなる。ただし、この説話が子供向けに書かれた童話集などに収録されていたことは、鈴木三重吉の作品などからも明らかである。そのような童話集、説話集で古いものを見つけることはできなかったが、ジェイムズ・ボールドウィンという作家が『五十の名高い物語』(1896 年) に「ダモンとピンティアス」「ダモクレスの剣」の二つのディオニュシオス伝説を収めている。

単に言及しているだけの作品まで拾うとなると、おそらく相当な数にのぼるであろう。最も有名なのは、シェイクスピアの『ハムレット』(1602 年) 第三幕第二場で、ハムレットがホレイシオに「親友デイモン」と呼びかける場面である。もっと古いものでは、ゼバスティアン・ブランツ『阿呆船』(1494 年) 10,13 に als Demades und Pythias という一行がある。近代ではスティーブンスンの『ジキル博士とハイド氏』(1886 年) が有名か。また、フォークナーの初期の作品に、『際限のないデイモンとピシアス』(1925 年) という奇妙な友情関係をテーマにしたスケッチがある。

〔5〕類話

ダモン・ピンティアス伝説の主な類話も紹介しておく⁽⁸⁾。まず、13～14世紀に成立したと考えられる説話集『ゲスタ・ローマーノールム』の第108話。ここでは二人の友人は二人組の盗賊になっている。片方が独りで盗みを働いて捕まり死刑を宣せられるが、相棒が人質を買って出るという設定になっている。これは明らかにダモン・ピンティアスの伝説をふまえて作られている。

『アラビアンナイト』第396～397夜、「オマル・ブヌル・ハッターブと若い牧人との話」。ある老人を殺してしまった若者が、その息子たちから報復を受ける刑に処せられる。若者は財産を弟に渡すため三日間の猶予を願う。この物語では、若者がその場に居合わせた見ず知らずの人物を保証人として指名することになっている。指名された男も快くこれを引き受け、若者が戻らないときは自分の命を差し出そうと言う。若者は約束どおり戻ってきて、これに感銘を受けた息子たちは復讐を放棄する。

「友人の身代わりになって自分の命を差し出す」というタイプの説話にまで範囲を広げると多すぎて本稿で扱える範囲を超えてしまう。ひとつだけ挙げるなら、キリスト教に改宗したスペイン系ユダヤ人、ペトルス・アルフォンシが12世紀初頭に著した『知恵の教え』の中の一話がよい。「蟻と雄鶏と犬について」と題された説話に付された例話、「非の打ちどころのない友だち」というのがそれである。落ちぶれたエジプトの商人が殺人を目撃するが、自棄になっている彼は自分がやったとうそをついて罪をかぶってしまう。商人が死刑を言い渡されて磔台に連行されるところを、以前にこの商人から大きな恩を受けたことのある友人が目撃する。彼は恩返しのために、殺したのは自分だと言い立てて身代わりになろうとする。ところが、この顛末を見ていた真犯人が自責の念から自首して出る。結局三人とも王から罪を許される、という話である。

IV シラーの『人質』

数ある文学作品化の中でも、シラーがヒュギヌスを題材に創作したバラード『人質』("Die Bürgschaft")は最も名高い。この作品の成立事情は少々複雑であり、冒頭に紹介した『走れメロス』の謎も直接にはこれに起因する。以下にその事情を順を追って説明しよう。

おそらくシラーは『人質』を創作する前から、ヒュギヌスについては幾分か

の知識を持っていたと思われる。彼は 1797 年 12 月 15 日付けのゲーテに宛てた手紙の中で、詩の素材が不足しているので思うように創作できないことを嘆いており、ヒュギヌスがそうした素材を提供してくれるのではないかと述べている。これを受けてゲーテは次の日にヒュギヌスの刊本を手紙とともに送っている。

シラーがヒュギヌスを材料に『人質』を書くのは翌年の 8 月 27 日から 30 日にかけてである。28 日の手紙の中では、ゲーテにヒュギヌスを通読したことを報告しており、この作品を読む喜びについて述べ、詩的な創作意欲を刺激されると書いている。さらに、ヒュギヌスを現代人の想像力が要求するものに合わせて作り直し、ギリシア神話・伝説のハンドブックを作ることは意味のある仕事だとも述べている。

9 月 4 日、彼は手紙といっしょに『人質』の手書き原稿をゲーテに送った。その手紙の中では、この詩がヒュギヌスに基づくものであることを示し、自分がヒュギヌスの物語（つまりはモエルススの物語）の中にある主要なモチーフをすべて見だし得たのかどうか気がかりだと言っている。ちなみに、ゲーテは翌日送った手紙の中で、川を泳ぎ渡って服の濡れている主人公がのどの渇きで倒れるのは不自然だという趣旨の感想を書いている。

しかし、こののち『人質』には変更の手が加えられる。1803 年に詩集の豪華版を出す計画が持ち上がり、そこでは従来の詩集をそのまま収録するのではなく、全体を新たに編集し直すことになったのである。この編集作業は 1804 年の末に行われたが、次の年の 5 月にシラーは他界してしまう。そのあと少々複雑な事情があつて、結局この豪華版は出版されなかった。この豪華版用の原稿は、1904 年の「百年版シラー全集」に収められてようやく読者の目に触れることとなる。シラーはこの豪華版用原稿において、題名の "Die Bürgschaft" を "Damon und Pythias" に変更し、詩の二行目の Möros という名を Damon に書き換えてしまった。このようにして、題名と一単語のみの違いではあるが、問題のバラードには二つのバージョンが残されることになったのである。

シラーがなぜこのような変更を加えたのかは判然としない。おそらく、彼はもともとダモンとピンティアスの伝説を知らなかったのではないか。ヒュギヌスのバージョンによって初めてこの伝説に触れたものと思われる。その後『人質』を完成させてから、なんらかの折りに Damon と Pythias の名前の方が人口に膾炙していることを知ったのであろう。マイナーなヒュギヌスの人物名ではなく、一般的に知られた名前の方がよいと判断しての変更ではなかろうか。

この『人質』という作品は、基本的にはヒュギヌスの伝承に素直に従っている。したがって、「妹を嫁がせるため」「三日という期限」「増水した川に帰路を阻まれる」といったヒュギヌス特有のモチーフはそのまま取り入れられている。ただし、この作品独自の要素も見受けられる。まず、ピュタゴラス学派に関する言及がないのはヒュギヌスと同じであるが、詩はいきなりモエルスがディオニュシオスを殺そうと近づく場面から始まる。逮捕されて理由を問われると、モエルスが「町を暴君から救うため」と答える順序になっている。

また、セリヌンティウスの名前はどこにも出てこない。「友人」などと言及されるのみである。モエルスの名はそのままドイツ語で Möros と表記されているが、二行目に一度現れるのみである。一方、詩の後半でフィロストラトスというモエルスの召使いが登場する。これは古代の伝承には全く存在しない人物であり、シラーの創作と思われるが、そのような人物にわざわざ名前が与えられているのは少々奇異である。なお、この詩の韻律はイアンボスとアナバイストスの混合である。セリヌンティウスという名前は、長いものではあってもこの韻律にのせることは可能であり、韻律が名前の言及されない理由とは考えられない。

激流の障害を乗り越えるというモチーフはヒュギヌスによるものであるが、シラーは盗賊に襲われるという第二の障害を加えている。さらに、主人公が疲労のために動けなくなるが湧き水で元気を取り戻すという場面を、自らの想像力によって作り出している。こうした帰還途上の障害と克服の場面、特に増水した川に行く手を阻まれる場面が詩のかなりの部分を占めていることが、『人質』という作品の大きな特徴である。ヒュギヌスのバージョンも他の古代の伝承に比べると劇的であるが、シラーはこれをさらに劇的なものにしていると言える。

V 太宰治の『走れメロス』

ここまでの経過を見てくれば、太宰が『走れメロス』において主人公の名を「メロス」とした理由は明らかであろう。彼は作品の末尾に「古伝説と、シルレルの詩から」と付記して自作の出典を明らかにしているが、「古伝説」とはヒュギヌスのことであり、「シルレルの詩」とはシラーの『人質』、それも改定前の『人質』を指している。つまり詩の二行目にある Möros をカタカナで表記すれば「メロス」となるわけである。しかしセリヌンティウスの方は納得が

いかない。シラーの詩には彼の名は一度も出てこないし、太宰がヒュギヌスを直接読んだということもあり得ないからだ。この謎を解く上で重要な点は、太宰はシラーを原文で読んだわけではないということである。彼はシラーの詩集を翻訳で読んだのだ。

彼が読んだ訳書は特定できる。それは 1937 年に改造文庫の一冊として出版された、小栗孝則訳の『新編シラー詩抄』である。太宰が当時読むことのできた訳書は、ほかにこの小栗訳の旧版しかなく、こちらには『人質』の詩は収録されていない。この小栗訳はシラーの改訂前のテキストに基づいており、当然題名は『人質』、二行目も「メロスは」で始まっている。さらに訳者は巻末に注解を付けており、この詩がイタリアの伝説に題材をとっていること、メロスの友人の名がセリヌンティウスであることなどを記している。太宰がセリヌンティウスの名を作品に登場させ、文末に「古伝説と」と付記したのはこの注解によっているのだ。つまり、この小栗訳とその注解を読めば、『走れメロス』という作品を書くための材料は全部揃うのであり、実際太宰はこれだけを材料に作品を書いたのである⁽⁹⁾。

以上が「メロス」という名前の謎に対する解答である。太宰の死後、『走れメロス』の題材について興味を持ち、これを明らかにしようとする人々が何人か現れたが、この人たちが今述べたような事情を知ることが、実は容易ではなかった。なぜなら、『走れメロス』以後に出版された『人質』の翻訳はすべて改定後の版、つまり豪華版用原稿に基づく版を底本としており、二行目は「ダモンは」となっていたからである。改造文庫の小栗訳はもはや入手が困難であったから、この小栗訳を見たことのない人々にとっては、メロスとセリヌンティウスの名は全くの謎に思えたわけである。

それでは最後に、ここまで概観してきた事柄を考慮に入れることによって見えてくる、『走れメロス』の独創性というものを考えてみたい。シラーの『人質』を読めば明らかなように、『走れメロス』はほとんどこのバラードの翻案である。例えば、ついに身動きできぬほど走り疲れたメロスが、湧き出る清水によって活力を取り戻す美しい場面も、シラーの発案をそのまま受け継いだものだ。しかし太宰は『人質』に多くのものを付け加えた。細かな点まで挙げていけばきりが無いから、ここでは最も独創的と思われる点だけを取り上げることにはしたい。

この伝説を伝える古代作家はみな、ダモンとピンティアスがピュタゴラス学派に属する人物であったということを明記している。この伝説自体ピュタゴラ

ス学派にまつわる逸話のひとつとして伝わったものであるから、これは当然のこととも言える。特に、アリストクセノスとディオドロスは、二人の友情を学派の相互扶助精神の一端を示すものとして書いてる。この伝説をピュタゴラス学派と結び付けていない唯一の作家がヒュギヌスである。ヒュギヌスに素直に従ったシラーも、当然ながらこの学派のことには触れていない。両者の作品を読んでみれば分かるとおり、主人公の二人がどのような人物であったのかという点に関してはなんの言及もないのだ。『人質』におけるメロスの導入は全く唐突と言ってもよい。太宰が『人質』の小説化を思い立ったとき、彼はシラーのようにメロスの人物像をあいまいにしたままではおけなかった。太宰はメロスを「村の牧夫」として造形する道を選ぶ。この「村の牧夫メロス」という設定こそ『走れメロス』の最も大きな特徴と言えるのではないか。

アリストクセノスのバージョンでは、ピンティアス（メロス）がシラクサイの市内に住んでいるという設定になっているらしく、帰還の期限はその日のうちということになっている事実はすでに述べた。その他の古代の伝承には期限が示されていない。ヒュギヌスだけが「三日間」という数字を明記している。シラーもヒュギヌスにしたがって、メロスが自ら「三日間」という期限を申し出、これを許されるという設定にしている。しかし両者ともメロスの郷里については多くを語っておらず、三日の期限のうちに妹を嫁がせて帰ってきたことしか述べていない。

太宰はこのシラーの背景設定を前にしてどのような想像力を働かせたのか。まず、主人公がシラクサイ市から三日で往復するのに適当な場所とはどこであるかと考えたはずだ。彼は市から遠く離れた農村に帰るという設定を選んだ。小説の冒頭で、メロスは妹の婚礼の準備のために未明に「村」を出発し「野を越え山越え、十里離れた」シラクサイの都にやってくる。そして買い物を済ませて親友のセリヌンティウスを訪ねようと歩いていたときには、「もう既に日も落ちて」いたと書かれている。村から町までは「十里」というかなりの道のりながら、夜明けから日没までの間に十分たどり着ける距離であることがここで示されているのだ。太宰は距離と時間に関しては明らかにこだわっている。王から釈放されたメロスは、夜に市を出て「一睡もせず十里の路を急ぎに急いで」、翌日の午前中に到着したことが語られている。やはり、急げば半日以内でたどり着ける道のりであることが示されているわけだ。この距離と時間が市への帰路を急ぐメロスにとって重大な意味を持つことになる。二日目に妹の婚礼を済ませ、問題の三日目の薄明に目を覚ましたメロスは、「これからすぐに

出発すれば、約束の刻限までには充分間に合う」と心にゆとりがある。急げば半日もかからぬ道のりなのだから当然である。しかし、豪雨で増水した川、山賊、激しい疲労といった障害のためそのようなゆとりはなくなり、日没までに間に合うかどうかの瀬戸際になってようやく到着するわけである⁽¹⁰⁾。

太宰は単に主人公の郷里を明示しただけでは満足しない。「三日間」という期限だけが問題なのであれば、十里離れた別の市を郷里に選んでもよかったはずである。彼は主人公を「村の牧夫」とした。これは単にそういう設定になっているというだけではなく、主人公の性格造形に大きく関わる問題なのだ。太宰はかなり入念にメロスの人物像を描出している。直接的には、メロスは「のんき」であり「単純な男」とであると述べられている。「内気な」妹、「律儀な」妹の婚約者といった道具立ても、メロスの性質、ひいてはメロスの所属する村の純朴な世界を映し出すものである。

メロスの性格は小説冒頭の一句にすでに表れているとも言える。「メロスは激怒した」。「激怒していた」のではない。彼はシラクサイの都で暴政が行われていたことなど、それまでは露とも知らなかったのだ。とある老人から市が暗くすさんでいる理由を聞き出して、突然王の暗殺を決意するのである。おまけに「買い物を、背負ったままで、のそのそ王城にはいつて」行くほどの愚直さである。シラーの『人質』の冒頭は唐突であり、メロスが暗殺に至る経緯の説明などは一切ない。太宰はそのような唐突さをそのまま小説に持ち込む気にはならなかった。彼は暗殺の理由をメロスの純朴さ、愚直なまでの正義感に帰したのである。また、メロスの純朴なキャラクターはセリヌンティウスとの固い信頼関係とも適合するものであり、これらの点からも「村の牧夫」という設定は実に好都合なものであったとすることができる。

妹の婚礼で陽気に騒ぐ村人たちに囲まれて、メロスは「この佳い人たちと生涯暮らしていきたい」と思う。そして妹を花婿の手に委ねると、「宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った」。安楽な牧歌的農村の世界と、いつ殺されるとも分からない緊張感に満ちた都シラクサイとの対照が意図されている。しかしメロスは平和な農村の世界に留まっていることはできない。彼を待つセリヌンティウスのためにシラクサイに急がねばならないのだ。この市への道程において、メロスの純朴な人間像は驚くべき変容を見せる。

激流を渡り、山賊を蹴散らしたメロスも、激しい疲労のためついに倒れ込み、動くこともかなわなくなる。彼は最初、持ち前の純粋な正義感にふさわしく自

分を責めるが、そのうち「もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐された根性が、心の隅に」巣喰う。心の中で言い訳を繰り返し、セリヌンティウスが死ぬなら自分も死ぬと決意を固めるが、それもつかの間、最後には自嘲的になり、正義だの真実だのという価値観は放り出して、悪徳者として生き延びてやろうかなどと言い出す始末である。このような心の中での複雑な葛藤は、純朴で愚直なメロスの性格とはそぐわない。むしろこれは、作者太宰がメロスの立場に置かれたら示すような思考なのではないか。

自棄になって眠り込もうとするところに、湧き水の音が聞こえる。清水を口にして精力と希望を取り戻したメロスは、さらなる変貌を遂げる。行く手にふさがるものを跳ね飛ばし、「黒い風のように」超人的なスピードで駆け抜けていく。いつのまにか彼は全裸の姿になってしまった。走るのを止めるよう説くセリヌンティウスの召使いには、「信じられているから走るのだ」と答えつつも、「私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの為に走っているのだ」と言い出す。最後の力をふりしぼって走る彼の頭はもはや「からっぽ」で「何一つ考えて」おらず、「ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて」走るのだ。ここに至って、メロスは原始的、神話的な存在にまで超越してしまう。しかし、再会した友と殴り合い、抱き合い、王から罪を赦された彼は、ひとりの少女から緋のマントを差し出され、初めて自分が全裸であることに気づき、「ひどく赤面」する。最後には元の純朴な「村の牧夫」に戻ったことが示唆されて、物語は閉じられるのである。

伝説の最も古い形であるアリストクセノスのバージョンにおいては、ピンティアスは都市の住人であり、保釈の期限は当日中であつた。ここではピンティアスが約束どおり戻ってくるかどうかだけが問題だったのであり、それはそれで理に適った設定である。しかしなぜかこの設定は後代の作家に引き継がれなかった。特にヒュギヌスのバージョンは、保釈期限を含めいくつかの点でアリストクセノスから大きく隔たっている。上で見たように、太宰が主人公を「村の牧夫」として造形したのは、元をたどればヒュギヌスが「三日間」という猶予期限を明記していたからである。もしヒュギヌスがアリストクセノスに近い話を伝えていたら、『走れメロス』はどのような作品になっていたであろう。ひょっとするとメロスは走らなかったかもしれない。いや、そもそもヒュギヌスによるドラマティックなバージョンが存在しなかったら、シラーもこれを作品化しようとは思ひ立たなかったし、『走れメロス』も生まれなかったのではないか。

注

(1) 「ディオニュシオスの耳」に関しては, Sabine, W.C., *Collected Papers on Acoustics*, Cambridge, 1922, 273-276 を参照.

(2) 残念ながら Sabine はその 16 世紀の出典を挙げていない. ヨハン・ベックマン (『西洋事物起原 I』, 特許庁内技術史研究会訳, ダイヤモンド社, 1980 (原著 1780-1805), 266-267) は, 「耳」がピュタゴラス学派のアルクマイオンによって最初に指摘されたと述べているが, そのような記述を見つけることはできなかった.

(3) シチリアのディオドロス『世界史』22,63,3, キケロ『トウスクルム』5,58, 『義務について』2,25, ワレリウス・マクシムス『著名言行録』9,13(ext),4, アンミアヌス・マルケッリヌス『歴史』16,8,10, プルタルコス『ディオオン伝』9.

(4) この逸話を物語の形で伝えるのはキケロのほかに, アンミアヌス・マルケッリヌス『歴史』29,2,4, マクロビウス『「スキピオの夢」注解』1,10, エウセビオス『福音の準備』8,14,31 などである. また, ホラティウス『歌章』3,1,17, ベルシウス『風刺詩』3,40, ボエティウス『哲学の慰め』3,5 などではダモクレスの名を出さない暗示的表現であり, この逸話が当時すでに周知のものであったことが分かる. 後代においては, 例えばジョージ・エリオットが『ミドルマーチ』第 51 章で言及している.

(5) デイオドロス『世界史』10,4,1, キケロ『義務について』3,45, 『善悪の究極について』2,79, 『トウスクルム』5,63, ワレリウス・マクシムス『著名言行録』4,7(ext),1, ヒュギヌス『神話伝説集』275, プルタルコス『友人を多く持つことについて』93E (言及のみ), ポリュアイノス『戦術書』5,2,22, ボルビュリオス『ピュタゴラス伝』60 (アリストクセノスの再話), コンスタンティノス七世『美德と悪徳について』1,222.

(6) バラリスはアグリгентゥムの僭主であり, なぜここがディオニュシオスでないのかは全くの謎である.

(7) 後代の文学作品化については, 詳しくは Raschen, J.F.L., *Earlier and later versions of the friendship-theme I, "Damon and Pythias," Modern Philology* 17, 1919, 49-53, Frenzel, E., *Stoffe der Weltliteratur*, Stuttgart, 1988⁷, 137-139 を参照. なお, ハンス・ザックスの『謝肉祭劇』第 47 番に「暴

君ディオニシウスとダーモンの幸福論」(1553 年)という作品があるが、これは名前がダモンに変わっただけで、内容は「ダモクレスの剣」である。

(8) 類話については、ペトルス・アルフォンシ、『知恵の教え』、西村正身訳、溪水社、1994、265-266 と『ゲスタ ロマノールム』、伊藤正義訳、篠崎書林、1988、417-421 の注解を参照。

(9) こうした事情を完全に明らかにしたのは、角田旅人、「走れメロス」材源考、『日本文学研究資料叢書 太宰治 II』所収、有精堂出版、1985、171-182 である。また、小野正文、「走れメロス」の素材について、『太宰治研究 I』所収、筑摩書房、1978、292-303 は、もうひとつ別の素材が存在することを指摘している。それは高等小学校の国語の教科書に収録されていた「真の知己」という教材であり、太宰が少年時代に読んだはずのものである。この教材では、主人公の名前は「ダモンとピチウス」であり、ピチウスは「老父母の顔が見たくて」猶予を願い出る。保釈の期限は明記されていない。確かに素材となった可能性はあるが、一見したところ『走れメロス』との直接的な影響関係はないように思われる。

(10) ちなみに、古代は含み算であるから、「三日間」といえばメロスが逮捕された日を含めて三日ということになるはずだ。太宰においては逮捕された日を除いて三日である。